

第5章 島原実録物から見る「天草四郎」美少年像の成立

陳 其 松

はじめに

日本人に、「天草四郎」という人物について連想させたら、何が浮かんでくるのであろう。「島原の乱」、「16歳」、「原城」、「キリシタン」などのキーワードが想起されるかもしれないが、やはり「美少年」の印象が最も鮮明であろう。かつて司馬遼太郎も、日本の少年美崇拜を論じた時、天草四郎を「実在した」美少年の例として挙げた。

日本も、土俗的原形としては少年美崇拜の国だったといえなくはない。ヤマトタケルや桃太郎、一寸法師など神話や童話の雄々しいヒーローは、少年美を象徴していた。すくなくともシェークスピア劇にみるような成熟した男性がヒーローになることはない。実在した人物についても、源義経は牛若丸時代の少年美でその魅力が印象づけられているし、江戸初期、島原ノ乱の反乱軍にかつがれてにわかに戦闘的護法の象徴になった天草四郎も少年であった¹⁾。

しかしながら、「美少年」としての天草四郎がこれほど現代日本人の意識に定着したとはいえ、歴史人物としての「天草四郎」はあまりにも不明な点がたくさんある。総勢12万4千人の幕府軍と対峙し、同志の3万7千人とともに殉教を遂げた「天草四郎」の実像を迫ろうとしても、残存している史料があまりにも少ない。あるとしても、幕府の記録に依拠しなければならない。その敵対側の書き手は、当然のように、天草四郎を「美少年」と書いたわけがなかった。それでは、後世に伝わった伝奇的、ロマン的な天草四郎像は一体どのように生成したのか。

この点に関して、天草四郎の人物像に先駆的な研究者、海老沢有道氏は文献誤読の可能性を指摘された。海老沢氏は四郎に関する記述に、元々「才能、才覚」を意味する「器量」という中世語が近世で「容顔」という意味に変わったゆえ、誤解を招いたのではないかと、解釈した²⁾。

ただし、語彙の意味転換による誤読というのは、四郎に関する情報流通が一時断絶しない限り、簡単に生じるとは思いかねる。江戸時代を通じてよく読まれた『島原記』など島原実録物、軍記物の伝播や継承関係³⁾から見れば、そのような大きな断裂が見えてこない。それどころか、実際に天草四郎の形象

1) 司馬遼太郎 (1985)、『街道をゆく』巻25、朝日新聞社、128頁

2) 海老沢有道 (1967)、『天草四郎』、人物往来社、19頁

3) 菊池庸介 (1997)、『「天草軍記物」実録の成立——仮名草子『嶋原記』から「田丸具房物」へ』、『近世文芸』66、42頁

は、江戸時代にわたり、軍記、実録、演劇⁴⁾ など多様なテキストにより再生産されつつあった。天草四郎の「美少年像」は、誤読という解釈以外に、大衆文化の角度から再考する必要がある。

本稿は、上記の問題意識をふまえ、島原実録物や、「天草四郎」に関する文献史料に基づき、四郎の美少年像成立までの軌跡を分析したい。

I. 四郎像の原点：「天人」、「奇術」、「水瘡」

1638年（寛永15）2月28日、一揆勢が3ヵ月も籠城した原城が陥落した。キリシタンの根を絶つため、幕府軍は3万7千人の一揆勢を容赦なく全滅させることにした。その結果、一揆側の文字記録が殆ど残存されなく、わずかな史料を通じ、断片的にしか知ることができない。原城内唯一の生還者である山田右衛門作⁵⁾ によるものはその一つである。彼の覚書「山田右衛門佐口書写」から、かすかにではあるが原城内の様子を伺える。この覚書から天草四郎に関わる部分を節録すると、下記の三点となる。

一、今度島原切支丹発申候次第の儀は、松右衛門・善左衛門・源右衛門・宗意山・善左衛門と申者共、二十六年以前より天草の内、大矢野千束島と申所に数年山居仕罷有候処に、去年丑六月中旬より彼五人の者共申廻し候は天草の内、かうつらと申所住居仕候伴天連、二十六年以前御公儀より御拂異国へ被遣候刻、伴天連書物を以申置候は当年より二十六年目に当て、必善人一人生れ出へし、其幼き子不習に諸字を究め、天に印し顯れ木にまんぢうなり、野山に白旗立て諸人の頭にくるす立可申候、東西に雲のやけ必有るへし、諸人の住所皆やけはつへし、野も山も草も木も皆焼可申由書之置候由申候⁶⁾

一、天草に大矢野四郎と申者有之、右の書物に引合考へ候へは、彼書物に不違候間、是は天之使にて候、久敷事疑ひなしと諸人に右の五人の者申廻し貴ませ候、四郎生年十六歳に罷成候⁷⁾

一、四郎本丸にて碁を打罷在候処に、鍋島せいろより石火矢来り、四郎左の袖を打透し申候、城中の者存候は名誉可有と頓敷存罷在候処に、ヶ様に四郎さへ鉄炮に当り、其上側に罷在候者共多く亡ひ申候事、不吉の仕合力を落候由、皆々申心よはく存候、右の勢楼より打申鉄炮は多分はつれ不申手食死人数多御座候て迷惑申候⁸⁾

4) 天草四郎が江戸時代の演劇における形象については、位田絵美「長崎民衆が想う「島原の乱」——「長崎旧記類」の山田右衛門作記事をめぐって」、『文学研究』95、2007年、82-95頁を参照されたい。

5) 原城一揆勢の指導部の一人である。反乱に加勢したが、戦いの後期に幕府軍と内通し、密かに矢文の往来をした。やがて内通が露見し、彼は牢獄に投じられたが、間一髪で幕府軍の総攻撃で辛うじて助命した。南蛮絵師でもあるし、著名な「四郎陣中旗」の作者とも言われるが、的確な証拠がない。

6) 「山田右衛門佐口書写」、林銑吉編『島原半島史』中巻、国書刊行会

7) 同上

8) 同上

覚書では、天草四郎が首領となる経緯と山田自身の信仰危機を述べた。26年前に残された伴天連書物の中に「善人」の降臨を予見した。この善人が、学ばずに字を読める特異な人間であり、彼の降生とともに、天変地異が起こるという。当時16歳の天草四郎はその「善人」であると信じられ、尊ばれたという。ただし、籠城戦の時、四郎の左袖が流弾に打ち抜かれ、従者も亡くなったという事件が起こり、城内が動揺した。山田もそれをきっかけに内通を決心したという。

これに似た内容は幕府側の記録にも見られる。「別当左衛門覚書⁹⁾」では、伴天連書物のことと四郎の天才的才能に言及した上、彼が行った「奇術」の内容も詳しく描かれている。

一、其時分、大矢野村に益田四郎と申者、年十六歳にて名誉を致し候由、近国風聞仕候、此四郎稽古なしに読書を仕、諸経の講釈をいたし、臆て切支丹の世になり候よし申勤め、其證據を見せ可申とて、天より鳩を招寄、手の上にて卵を産せ、夫を割て吉支丹の經文を取出し見せ申候者、或は竹に雀のとまり居たるを枝折なとにいたし、萬不思議なる事のみ仕、天草と有馬との間に有之、湯島と申島、海上を歩み渡り見せ申候よし、是を見及、聞及、元來吉支丹を心底に含申候者は彼湯島に出合、ロ々勤めを請申候由、其後此島を談合島と申候¹⁰⁾

このような記述から、四郎が空から鳩を呼び寄せ、手のひらに卵を産ませた、とある。そして卵を割ったら、キリシタンの經文が現れる。あるいは雀が止まっている竹の枝をそのまま折ったり、海を歩き渡ったりしたという。それほど奇跡を起こした上、彼が天人、善人であることを疑う余地はないであろう。相似する記録は他にも多見したので、当時の流行した風聞に間違いない。

以上の資料からは、四郎の宗教的リーダーとしての役割が明白であるが、肝心の容貌については見かけなかった。わずかであるが、『島原記録』に、彼が小瘡を患うという記述がある。

一、四郎親ハ十月九日ニ肥後の宇土より迎えに参り候得共、小瘡煩い申す由にて参らず候。親も一処に罷り帰り申さず。四郎祖父も大矢野にこれあり候事¹¹⁾

また、成立年代が不明だが、「高来郡一揆の記」に、落城後、山田右衛門作による首実検の時、四郎は「頬先に水瘡のあと」があるので、見分けやすいという記録がある¹²⁾。

以上の諸文献から、「末鑑」と呼ばれる伴天連書物の予言を信じ、「天人」、「善童」と呼ばれる天草四郎が奇術を行い、その特殊性から一揆が結束に至ったことが分かる。しかし、四郎の宗教的リーダーとしての側面がよく記録されたのに対し、彼の容貌についてはあまり言及されなかった。ただわずかに残された記録では、彼の顔に疵がある可能性を示したのみである。

9) 作者の別当左衛門は島原市街有馬町別当を務め、幕府軍に加勢し、軍功を立てたという。

10) 「別当左衛門覚書」、『改定史籍集覽26』

11) 海老沢有道『天草四郎』1967年、19頁

12) 「高来郡一揆の記」、林銑吉編『島原半島史』中巻、国書刊行会、468頁

天草四郎の実像はやはり不明なままであるが、少なくとも島原の乱が収束した直後には、後世に広く伝わった「美少年像」がまだ現れていなかったと説明できる。

Ⅱ. 「美少年」四郎の出現

A. 『島原記』の成立

戦乱が収束してから2年後（1640・寛永17年）、大乱の経緯を一部始終記録した近世軍記物、『島原記¹³⁾』が出版された。同書は、慶安年間（1648-52）から宝永年間（1704-11）まで少なくとも5回の改版¹⁴⁾を重ね、広く読まれたと思われ、大乱直後に流伝された島原の乱への印象を窺うには重要な参考資料である。近世の島原実録物の原型（プロトタイプ）とも言える存在なので、少々ページを割いて紹介したい。序文によれば、作者は難波（大坂）の貧しい家庭で生まれ、実際に戦場を駆けた1人であった。彼は「ありのまま」の見聞と、「おもしろい」合戦の有り様を記録したといい、作品の客観性を強くアピールした¹⁵⁾。それゆえに記録的な性格が強く、城内の様子については殆ど「山田右衛門佐口書写」などの史料¹⁶⁾を踏襲した。そういうわけで、四郎に関わる記録は、「末鑑」、「天才」、「奇術」、「小瘡」など¹⁷⁾に留まり、天草四郎の美少年像が見えてこない。他には、四郎大将の指物が「金ノ瓢箪ノ出シクルス¹⁸⁾」や著名な「天地同根万物一体」の矢文¹⁹⁾、「益田四郎時貞試筆ノ詩²⁰⁾」などがあるが、彼の容貌については全く言及されなかった。

B. 『島原記』から「田丸具房物」へ

天草四郎の形象にあまり触れなかったが、『島原記』の発刊は幕府の情報統制の下で、最初に島原の乱を「実録物」の一分野として成立させた大きな意味がある。『島原記』以降、数多くの「島原実録物」が出回り、幕末期に至るまで広汎に読まれるようになった。「島原実録物」の代表的な物とその特徴は、【表1】を参照されたい。

13) 『島原記』の成立と各版の比較について、大磯義雄「島原の乱への仮名草子の反応」1955年、阿部一彦「『島原記』の諸特徴」1979年、若木太一「『嶋原記』の生成とその展開」1986年などを参照されたい。

14) 若木氏によると、少なくとも慶安二年、寛文十三年、貞享五年、宝永元年、宝永五年、五つの版本がある。それ以外にまた無刊記版の存在も確認された。

15) 阿部一彦「『島原記』の諸特徴」『淑徳国文』20、1979年、73頁

16) 『島原記』序文、「…就中徒黨の行動は山田右衛門作言記の以記。」

17) 『島原記』巻一

18) 同前、巻二

19) 同前、巻二

20) 同前、巻三

【表1】代表的な島原実録物一覧²¹⁾

グループ	代表作品	推定成立	特 徴
島原記	島原記	1640 (寛永17)	作者の見聞と覚書に依拠し、より客観的
	山田右衛門作以言語記 (山田右衛門作物語)	1830 (文政13)	島原記と同文
島原実録 ²²⁾	西戎征伐記	1716-1735 (享保年間)	【島原記】よりフィクション性が高く、首謀者たちの性格が一揆衆より前面に出された
	嶋原実録	1716-1735 (享保年間)	同上
田丸具房物 ²³⁾	天草軍談	1736-1747 (元文-延享)	内容的大きく変化。五人の首謀者が完全に入れ替わり、幕府軍と一揆軍の英雄同士の戦いとなり、フィクション性が高い
	天草征伐記	1748-1750 (寛延年間)	段落に加筆などがあるが、話の筋は天草軍談とほぼ同じ
	天草軍記	1804-1817 (文化年間)	天草軍談とほぼ同じ
続田丸具房物 ²⁴⁾	寛永南島変	1764 (宝暦14)	話の筋は田丸具房物にならう
	金花傾嵐抄	不詳	話の筋は田丸具房物にならう
	参考天草軍記	明治	金花傾嵐抄と同じ内容だが、文体が違う
	天草騒動	明治	参考天草軍記とほぼ同文
他	四郎乱物語	1802(享和2) 以前 ²⁵⁾	特に天草を中心に話を纏められ、他の実録物に見られない記録が多くある

【表1】にあるように、『島原記』の次に、『島原実録』という作品群が享保年間（1716-36）に現れた。森宗意軒、天草玄察、赤星主膳、千々輪五郎左衛門などの首謀者を活写する技法から、『島原記』よりフィクション性が高いと見られた²⁶⁾。『島原実録』群の出現は、島原の乱から70年余り経ってから、島原実録物の性格が次第に記録性から伝奇性へと転換したことを示している。そして、元文から延享年間（1736-48）に、島原実録物の中に最も広く流布され、後の島原実録物の構成にカリスマ的な影響を与えた「田丸具房物」が登場した。「続田丸具房物」は大抵「田丸具房物」に継承した物であり、物語の構成に大きな変化がない。ゆえに、「田丸具房物」は島原実録物の形式を固定させる役割を果たしたと考えられる。引き続いて、「田丸具房物」が如何に天草四郎の美少年像の生成に影響したのかを論じていきたい。

21) 主には大磯義雄「島原の乱への仮名草子の反応」1955年、阿部一彦「『島原記』の諸特徴」1979年、若木太一「『嶋原記』の生成とその展開」1986年、菊池庸介「『天草軍記物』実録の成立——仮名草子『嶋原記』から『田丸具房物』へ」1997年に依拠して作成した。成立年代が不詳なものは作品の継承関係で順を定めた。

22) 菊池の分類に従う。他にも『島原実記大全』、『嶋原陣実録』などの版本が存在する。

23) 菊池の分類に従い、「田丸具房」と署名された実録物に指す。

24) 作者が田丸具房と署名されないが、物語の構成が田丸具房物に強く影響されたものを指す。

25) 上田宜珍が享和2年に脱稿した「天草風土考」の中で『四郎記』を引用しているので、その前にすでに流布したことが分かる。亀井勇編『四郎乱物語』、『四郎乱物語復刻について』1973年

26) 菊池庸介（1997）、45頁

C. 「田丸具房物」にみる「義経的な」天草四郎

「田丸具房物」は、主に『天草軍談²⁷⁾』、『天草征伐記²⁸⁾』、『天草軍記²⁹⁾』、これら3つの系統に大別できる。その中で、『天草軍記』が一番遅く成立したと推定されるが、構成や記述の相似性から見れば、『天草軍談』を継承したものと考えてもよからう。物語は同じであるが、所々細かく加筆されたのは『天草征伐記』である³⁰⁾。便宜上、以下は記述が最も詳しい『天草征伐記』を主な素材として考察していきたい。

まず、田丸具房が描いた天草四郎の生い立ちを見てみよう。

爰ニ四郎ト云ヘル者（中略）父ハ肥前国嶋原領松倉豊後守ノ百姓ニテ小原村ノ惣名主庄屋渡辺左衛門ト云リ、妻ハ天草甚兵衛カ妹也、其頃四郎ハ十七歳ニ成リシカ、天性聰明叡智ニ候器量人ニ勝レ諸藝ニ達シ、学文廣大ニ候哥道ニ達シ、名誉ノ世倅ト諸人称賛セリ、父小左衛門元来長崎ノ産ニ候、此家ヘ入聲ニ来ル也（中略）四郎ハ（中略）南蛮国ノ異人ヨリ妙術ヲ傳受テ、種々ノ奇妙ヲ為候（中略）又天草嶋ノ伯父甚兵衛方ヘ行テ、千々輪カ弟子ト成リ、劔術兵道ヲ学フニ敏語惣明ニ候、悉ク理ニ通達候速ニ名人トナリ³¹⁾

ここで、四郎の家族の構成は史実とは違い、四郎は渡辺左衛門の息子、実父であるはずの甚兵衛が伯父という設定になった。17歳の四郎は聰明叡智であり、器量も常人より優れ、諸芸と学問にも精通するため、周囲でも評判であったという。また父親が長崎出身という因縁で、四郎が「南蛮国の異人」から「妙術」学び、千々輪から剣術と兵法を学んだという。自身の「敏語聰明」に加え、恵まれた環境で教育された四郎は、将来総大将に相応しい器量と才覚を養ったことが伺える。

元来四郎ハ天然廣胸ノ器量ニ候不敵ナレハ常々百姓原カ今判官ト誉ル程ノ者³²⁾

麒麟児と思われた四郎に百姓が「判官ト誉ル程ノ者」と絶賛した。ここの「判官」は当然源九郎判官、源義経を指している。つまり、作者の田丸具房が天草四郎の器量の優れが伝奇的な武将、源義経と比べられるという。なお、一揆総大将を推挙したシーンにも、彼が次のように描かれた。

四郎カ装束ヲ随分ト花羨ニ候仕立ケル金銀ノ織物ヲ以テ判官義経ノ装束ノ如ク³³⁾

27) 関西大学図書館増田文庫所蔵本による。

28) 国文学研究資料館所蔵12巻カナ本による。

29) 関西大学図書館増田文庫所蔵、『天草軍記大全』による。

30) 同上、49頁

31) 『天草征伐記』、『天草四郎時貞吏』による。

32) 同上

33) 同上、「四郎時貞大将ニ取立付唐津勢富岡江出勢吏」による。

四郎の装束は金銀の織物であり、まるで「判官義経」のようであると作者が再び感嘆の声をあげた。周知の通り、義経は古来女子のような美少年として認識されてきた。この文章を読んだ人は、必ず天草四郎を、義経のような凛々しく美しい若武者と想像するであろう。

『天草軍談』と『天草軍記』にも似た記述は見られる。同じく惣大将を推挙するシーンでは、例えば『天草軍談』に、天草四郎を「稀代不思議の御大将今判官殿御下向なりたるより惣大将と仰ぐべし面々安堵し悦び給へ³⁴⁾」とあり、『天草軍記大全』にも、「抜群の器量の者にて諸人常に今判官と異名する程の者」や「神變不思議の大将今判官渡辺四郎殿来臨也今日より惣大将と尊敬すべし面々も安堵して悦び申」とある。天草四郎を源義経で喩えるのは、「田丸具房物」の一大特徴だと考えるのは妥当であろう。この両者の形象混同が、後の天草四郎美少年像に強く影響したと指摘しておきたい。

D. 田丸具房と講釈

四郎を義経で喩えるのは作者の田丸具房の背景にも関連するかもしれない。江戸時代における実録作家の多くは「講釈」、つまり軍記物の朗読も行うという。さらに、江戸で初めて夜講釈をした人物、「田丸佐右衛門」が田丸具房とは同一人物の可能性も指摘された³⁵⁾。もしも田丸具房が本当に講釈師であれば、彼によってアレンジされた島原実録物が平家物語、義経記などの軍記物語からの影響で、体裁的に軍記物に接近するのは考えられないわけではない。それで幕府軍と対抗できるように一揆勢に千々輪五郎左衛門、芦塚忠右衛門、天草四郎、天草甚兵衛などの英雄が多く創出された。その中に16歳で人生の終末を迎えた天草四郎の悲劇性によって観客の共感を引き起こそうとしたら、やはり悲劇的な少年英雄、源義経以外にならう。その「悲劇の美」が、源義経の「外見の美」と結びついた時点から、美少年天草四郎が誕生した。

E. 「続田丸具房物」

「続田丸具房物」には、基本的にこの四郎＝義経像を継承し、物語を展開した。例えば『天草騒動³⁶⁾』に「天草四郎奇術を顯す事 並四郎を惣大将に立る事」という一節には次のようにある。

〔四郎は〕未だ七夜の内より眼の動く様子百日も過たる兒の如し、色白くして二歳より言語能分り、三歳にて書を認め、謠をうたふなど、大人に等し、見る人皆奇なりとす、父小左衛門は元來博學多才なり其子四郎も父に劣らぬ秀才にして、學問劔道を好み、常に伯父甚兵衛に親み、千々輪の弟子と成り劔術を學び、又蘆塚に従ひて軍學を習けるに、自然生れ付器用發明なれば、一を聞て十を知り、豫て六人の人々共懇意に致し、又密かに切支丹宗を信仰し、折々奇術を行ひける故、人皆耶蘇の再生ならんなどと云ふ³⁷⁾

34) 『天草軍談』、「一揆惣大将四郎時貞の事」

35) 菊池（1997）、註19

36) 『近世実録全書』（12巻）、早稲田大学出版部

37) 同上、67頁

ここでは四郎の生い立ちを述べている。内容は田丸具房物とは大別がないが、生まれてから「色白い」と書いてある。そして、四郎が惣大將就任を承諾したあと、芦塚忠右衛門がお祝いの宴会で、

此度の企て宗門繁昌の基、天帝の加護有る故、我々斯の如く寄合候へども、惣大將無くては大義成難し、然るに奇代不可測の大將今判官とも申べき四郎殿御來臨なり、今日より惣大將と仰ぎ、面々安堵し悦ぶべし³⁸⁾

と四郎の加勢に大いに喜んだ。なお、その日の四郎の容姿については、

下に白無垢上に紫綸子を着、紋紗の長上下を穿ち、金造りの差副を横たへ、同太刀を手に提けて悠然として立出たる行粧、歳は十七にして色白く、眉秀で威有て猛からず、實に義経とも云べき容體なり³⁹⁾

と、明確に四郎を義経と同一視した。『天草騒動』は前の『参考天草騒動』と『金花傾嵐抄』とはほぼ同文であるため、「田丸具房物」の四郎＝義経像の影響が江戸以降に至っても強く存在したと確認できる。

F. 編録に見る天草四郎美少年像

島原実録物以外の編録文献に見る四郎像はどうであろう。管見の限り⁴⁰⁾、天草四郎の容姿を「美麗」と記録し始めたのは村井昌弘と肥島寓が輯録した『耶蘇天誅記』である。その内容は次のようである。

五々ノ曆数ハ、來ル寛永十五年戊寅ニ当レリ、彼天童師ト申ハ聞モ及ビクルヘシ、天草ノ大矢野ニ御座アル四郎殿ノ御事ナルヘシ、抑四郎殿ノ御拳動ヲ伝ヘ聞クニ、当年御齡十五歳容顏美麗ニシテ晝ケル天人ノ如ク、聡明叡智ニシテ不見ヲ知り不聡ヲ覺リ、七、八歳ノ時ヨリ儒・佛・神ノ三教ヲ明ラメ、詩ヲ賦リ歌ヲ詠ミ弁舌流ル、滝ノ如シ不測奇妙ノ方術ハ拳テ算ルニ暇ナシ、或ハ闇夜ニ眼明ラカニ、或ハ海上ヲ歩渡リシテ、或ハ坐ナカラ遠国ノ動靜ヲ知り、或ハ立トコロニ不具ノ病人ヲ治スルノ類ヒ、什麼人間ノ所為ナルヘキカ、斯ル尊キ天童師出世ノ時節ニ生レ合セタル嬉シサヨト語リケレハ、十人力中ニ九人マテハ言下ニ宗門ニソ帰依シケリ⁴¹⁾

ここもまた「末鑑」、「天才」、「奇術」など四郎伝説の定番が出てくるが、江戸時代前期の記録との大きな違いは、天草四郎は「容顏美麗」と明確に書いてあることだ。なお、彼の身なりについては、

38) 同上、69頁

39) 同上、70頁

40) 主に『続々群書類従』、『島原半島史』、『近世実録全書』、『改定史籍集覧』に収録された史料に基づき、他には亀井勇編『四郎乱物語』1973年、『天草征伐記』（12巻本）などを参照した。

41) 同上、「伴天連等説未来記事」841-842頁

才智庸人ニ超ヘ容貌士族ニ勝レテ如何様辺境地ニハ稀ナル天性トソ見ヘタリシ、然モ頃年父好次思フ旨アリトテ、彼世倅ヲ同国熊本ノ家中ニ仕ハシメテ、内々武家ノ作法ヲ見学ハセ、又肥前長崎ノ市中ニ居キテ文学ヲ励マセ、其繁花ノ体相ヲ見習ハセナト旁々心ヲ用ヒ養育教訓シケルホトニ自カラ起居モ蕭然ニ威儀モ鷹揚ナリケレハ如何ナル大身大家ノ子息ト云フモ強チニ耻ツヘクモ見ヘサリケリ、高来・天草ノ伴天連トモ余多ノ民心ヲ傾ケン為ノ方便ニ兼テ計ヲ示シ合セ、彼四郎時貞ヲ異人天童也ト風聞シ、粗宗門流布ノ機ヲ察シテ今度十月七日大矢野郷宮津ニ於テ吉利支丹ノ魁首ニソ取り立ケル、猶モ民族ヲ欺カンカ為ニ綾羅錦繡ヲ以テ装トシ金銀珠玉ヲ以テ佩トシ、扱宏才弁舌ノ伴天連トモ頭ニ白髪ノ霜ヲ戴キ額ニ盾攢ノ濤ヲ湛ヘナカラロ、未乳息キ五尺ノ童子ヲ神佛ノ如ク礼拝恭敬シ、主人ノ如ク膝行頓首シテ昨日ハスル不測ヲ礼シ今日ハスル奇特ヲ礼スナト、影モ像モ無キ謀計ヲ近郷他村ニ触レ廻リ愚昧ノ心ヲ奪ヒケル巧ミノ程コソ忙シケレ⁴²⁾

とあり、四郎は容貌が士族より優れ、威儀も鷹揚なるという堂々たる姿で描かれた。さらに惣大将に取立てられた時も、四郎は「綾羅錦繡」と「金銀珠玉」など華麗なる衣裳を着用したと記載され、「異人天童」の姿が躍然とした。なお、四郎が説法した時の様子は、

其時四郎威儀ヲ正シ、衣裳ヲ修メ、天女ノ如ク装ヒテ建達ヲ左手ニ携サヘ、上座ニ設ケタル褥ノ上ニ着座シ、唐音ノ如ク章句ワカラヌ言ニテ、何ヤラン伴天連トモニ説キ示シケル⁴³⁾

とある。『耶蘇天誅記』には、「田丸具房物」のような直接に義経で喩える記述はなかったが、「天女ノ如ク」など四郎の容姿を讃頌する記録は、義経の女らしい容姿からの名残かもしれない。四郎の「美貌」は編録にも収録されるほどのことから見ると、成書当時に「四郎美少年説」はすでに広く認識されたことを物語る。

「事実に於て誤謬少く⁴⁴⁾」と評された『耶蘇天誅記』は、数多く引用されたため、後の編録類にも影響が出た。例えば1846年（弘化3）の『原城紀事』では、「村井昌弘耶蘇天誅記十五卷、前録三卷、附録十卷、事実を審にし、浮説を斥く。比の編多く信を取る」と、『耶蘇天誅記』を参考にしたと明言している。それゆえに四郎に関する記述もかなり類似した。例えば、

好次子有り、字は四郎、資稟英異、五歳にして書を善くし、得る者装軸賞鑒す。（板倉氏覚書）嘗て熊本土人須佐半之丞に仕へて小姓と為る。志游学に在り。終に辭し去り、長崎に游学す。既にして反りて父と同居す。是に至り年甫めて十六、美にして儼、進止都雅、[女卓][女卓]処女の如し。（耶蘇天誅記、島原記、島原一揆、島原軍記略、天草軍記実録、一本島原記）

42) 同上、「伴天連等為四郎於魁首事」842頁

43) 同上、「益田四郎太夫説邪法事」843頁

44) 林銑吉編『島原半島史』中巻、国書刊行会、837頁

とあり、また

時貞を迎へ法を説男女群集、半信半疑、時成衣裳を美にし、威儀を飾り、端然として座に上り、松右衛門等に揖す。松右衛等礼拝尊崇す。観る者肅然たり。

とある。括弧のなかの参考資料を見たら、『耶蘇天誅記』と『天草軍記実録』などが挙げられている。凡例には「印本島原記、は腐浅厭ふ可し、坊本天草軍記は、虚誕悪無む可し、予の細くる所に在り」と作者は意識していたが、天草四郎の部分はやはり「虚誕」を免れなかったようである。

G. 「田丸具房物」と『耶蘇天誅記』

それでは、四郎の美少年認識をめぐり、編録類の『耶蘇天誅記』と実録類の「田丸具房物」との間に何らかの継承関係があるのか。両方とも的確な成立年代は不明で断定できないが、村井昌弘が生きていた元禄年間から宝暦年間（1693-1759）までの時代は、まさに『島原記』（宝永5年版）から、『島原実録』（享保年間）に移行し、『天草軍談』（元文から延享年間）、『天草征伐記』（寛延年間）が順次に世に出る時代に当たる。さらに、『耶蘇天誅記』の成書可能な時期を考えると、村井昌弘は享保の初めから致仕しているとされ⁴⁵⁾、『耶蘇天誅記』のような大部な書物をその前に書いていたとは考えられない。そして彼は享保年間に代表的な兵学、測量学の著作を殆ど1、2年おきに出した⁴⁶⁾ため、成書は恐らく元文年間から死去する宝暦年間までであろう。そうすると、『耶蘇天誅記』の成立時代はほぼ「田丸具房物」が流行した時期と重なっている。憶測の域を出ないが、16歳から兵学を志した村井が、かなり早い時期から島原実録物を目に触れていた可能性が高い。『耶蘇天誅記』に見る生き生きとした天草四郎像は、信憑性のある史料には出てこなかった以上、軍記物の影響を受けたと考えたほうが妥当であろう。

ともかく、『耶蘇天誅記』に見る天草四郎の美少年像と「田丸具房物」の四郎＝義経像から確認できるのは、享保から寛延年間、つまり18世紀の初頭から中葉までに、すでに天草四郎の美少年イメージは成立したことになる。

おわりに

今回の天草調査で、聖なる雰囲気白衣美人が十字架を胸に当て、祈っている図がよく見かけられた（【図4】）。聖母ではないかと思う人もいるかもしれないが、実はこの女性に見えるキャラクターは、間違いなく「天草四郎」である。しかも、これは作者の鶴田一郎氏の美人画一筋の20年の間、最初に描いた男性であるという⁴⁷⁾。

45) 『国史大辞典』、665頁

46) 同上、『神武迪精標題』（享保11・1726年）、『単騎要略被甲弁』（享保14・1729年）、『単騎要略製作弁』（享保16・1731年）、『量地指南』（享保18・1733年）、『神武講習家訓』（享保19・1734年）

47) 天草キリシタン館所蔵『天草四郎「祈り」』（2002年）の展示キャプションより。

四郎の「美」も時代と共に変わってくる。300年前に、美少年四郎は実録物を通じ、多くの民衆と親しくようになったが、小説、映画、漫画⁴⁸⁾、ゲーム⁴⁹⁾など現代大衆文化の領域でも、彼は再生産されつつある。文学作品も多数あり、堀田善衛の小説『海鳴りの底から』は天草四郎の美貌を、「頬にうすく水痘のあとが残ってはいるものの、顔立ちのととのった、きわめて美しい少年⁵⁰⁾」と執拗に描いた。1981年（昭和56）の上映で荒唐無稽と評された「魔界転生⁵¹⁾」もかなり話題を呼んだ。妖々しく、美しい天草四郎を演じた沢田研二と真田広之のキスシーンは、その時代の日本人が共有した記憶であろう。さらに地域の活性化にも天草四郎が貢献している。天草商工会が主催したPRイベント「天草イケメン料理人」の参加者（そのうち一人は女性）は、「美少年とされる天草四郎をイメージして⁵²⁾」選出されたという（【図3】）。これらの事例を見ると、「伝説と謎に包まれた16歳の美少年⁵³⁾」はどれほど現代日本人の深層意識に根を下ろしたかを物語る。

1907年（明治40）、23歳の木下杢太郎（太田正雄、1885-1945）が初めて有馬城跡を遊歴した時にも、次のように述懐した。

この城を見るものは、誰でも第一に天草四郎のことを想起すに違いない。ここは彼が最後に拠って終に滅んだ所である⁵⁴⁾。殊にその戦歿の時が十七歳であると聞いては、何故ともなく一種悲壮の感に打たれる。この一揆の起因はとにかく、これが盟主となった少年彼の動機、その心理等に至っては、旧記の載する所甚だ尠く、かえって後人の自由なる付度の余地を残してある。自分は天草四郎の事蹟には既に成心を持っている。始めはただ想像に過ぎなかったが、今は必然そうなくてはならなかった事実のように思われて来た⁵⁵⁾。

「天草四郎」形象の生成はまさに彼の感慨そのままである。「旧記の載する所甚だ尠く」天草四郎が、いつの間にか日本人の意識の中に、美化され、「そうなくてはならなかった事実のように思われて来た」。確かに、史実だけからみると、天草四郎は美少年とは言いきれない。ただ歴史の空白を、よく人間は想像と感情を持って埋め合わせる。本章で明らかにされた通りに、江戸時代における実録、軍記物の発展とともに発生した源義経と天草四郎の形象混同こそ、四郎美少年像の原点である。敢えて言えば、「空白」であるからこそ、『島原記』を始めとする島原実録物に物語として成立する可能性を与えたかもしれ

48) 赤石路代『AMAKUSA 1637』（2001-2006、小学館）や藤田貴美『SHIMAVARA』（1999-2000、ソニー・マガジンズ）などがある。

49) 「サムライスピリッツ」（1993）、SNK。ラスボスは「天草四郎時貞」というキャラクターで、華麗なる衣裳のデザインが1981年の映画「魔界転生」に影響されたと見られる。後には続作に味方キャラとして登場する。

50) 田辺貞夫「近代文学に造形された歴史上の人物（天草四郎）」、『国文学——解釈と教材の研究——』12、1969年、144頁

51) 映画「魔界転生」（1981）、監督：深作欣二、東映

52) 朝日新聞、2010年10月20日付朝刊

53) 天草四郎メモリアルホールのパンフレットによる。

54) ここでは、木下氏が一揆が立て籠もった原城を有馬城と誤認し、感嘆を発したのである。

55) 五人づれ『五足の靴』岩波文庫、61-62頁

ない。そして18世紀に入り、田丸具房物の出現は大きく島原実録物の形式と内容を固定させ、源義経＝天草四郎のイメージを流行させた。若くて美しい四郎像は、後の「続田丸具房物」にも引き継がれ、現代に至るまで影響を及ぼした。それぞれの乱世の終わりに立った二人の少年が、こうして時空を超えた文学の舞台で、不思議に華麗なる共演を遂げたのである。

【図1】 商議している四郎（島原記より）

【図2】 四郎の晒し首（島原記より）

【図3】 「イケメン」料理人（朝日新聞）

【図4】 天草四郎
（天草キリシタン館パンフレットより）